英　語

乗　富　智　子

1　英語における「よりよい未来を志向する子」

ICT の発達や SNS の普及により，日本にいながら世界各国の文化に触れることは容易となった。また，金沢にも多くの外国人観光客が訪れるようになり，子どもが外国語に触れる機会は多い。このような社会の中で英語を学ぶことは，自分とは異なる文化や価値観に触れることであり，自分と他者を結び付けるきっかけとなる。多様な文化や他者に触れ，それを理解しようとすること，そして相手にも自分を理解してもらおうと働きかけることが，「よりよい未来を志向する」ことにつながる。

英語は他者とコミュニケーションを図る力を育む学習である。他者とコミュニケーションを図るためには，自分のことを伝える（Production）だけではなく，お互いが相手のことを理解しようとする（Reception）ことが不可欠である。「よりよい未来を志向する」ためには，この相互理解をめざしたコミュニケーションをくり返し経験していくことが重要であり，英語がその役割を果たしていくことになる。英語では自己表現の活動が多く行われることから，子どもはコミュニケーションを通して自分のことを伝えると同時に，相手の伝えようとしている内容を聞くことで，相手の意図や気持ちなどを理解することができる。英語を学ぶことで，自分と異なる文化をもつ他者を理解しようとする子どもを育成したい。

本校の英語では，英語表現だけでなく，コミュニケーションの内容を重視する。それによって，子どもが相手意識，目的意識をもち子どもが「知りたい」という思いをもって聞いたり「伝えたい」という思いをもって話したりできるようにする。聞いて理解することはコミュニケーションの大切な要素であり，聞くことは英語を身に付ける上で不可欠である。たくさんの英語表現を聞いて理解する中で，子どもが必要な英語表現に気付き，学びながら「分かった」「伝わった」と感じることのできる授業をめざす。

以上のことから，英語における「未来を志向する子」を次のようにとらえる。

自分が知りたい・伝えたいという思いをもち 多様な英語表現に触れ 新しい表現に気付いたり適切な表現を選択・活用したりしながらコミュニケーションをくり返すことで 異文化や他者を理解しようとする子

2　英語における決める授業デザイン

英語の授業をするときに最も大切にしていることは，子どものよりよく決めた姿を教師が具体的に思い描くことである。この単元の学習を通して子どもにどのような姿になってほしいのかを考えることで，子どもは何を決めるのか，決めたことが何につながるのか，単元や授業の構成を計画的にデザインすることができる。子どものよりよく決めた姿に応じてゴールを設定し，子どもが目的意識をもって学習に取り組むことができるようにする。

英語では，自分が相手に伝えたいこと（内容）をもち，それにふさわしい表現（言葉）を選び，それらを目的に応じてどのように伝えるのか（方略）を考え，表出するというプロセスを経験しながら学習する。つまり，子どもは設定したゴールに到達するために，何を，どの表現で，どのように伝えるのかを決める。しかしながら，子どもが本当に知りたいこと，伝えたいことでコミュニケーションをするには，子どものもつ英語の語彙だけでは不十分な場合がある。そこで，日々の授業の中で教師が子どもにたくさんの英語表現に触れさせることを意識し，子どもが適切に表現を選択することができるようにしなければならない。

自分が決めた内容や言葉，方略がどうであったかをふり返ることで，子どもは学びの広がりや深まりを実感する。決めたことが適切であったかを見直し，次の学びへとつなげる。英語では，１時間の授業のふりかえりに加えて，単元や学期全体での自分の学びをふり返る。自分が決めてきたことが自己の変容にどう影響を与えていたのかについて考えることで，子どもは自分の変容や成長を認識し，満足感や達成感を味わうことができると考える。

3　決める授業の手だて

(1)　ゴールを見据えた学習計画

子どもがよりよく決めるためには，子どもの興味・関心を高め，英語でコミュニケーションを図る必要感がある内容や場面を設定することが重要である。子どもにとって必要感のある内容や場面を設定することで，子どもが生活経験，知識，既習表現などを活用し，理解したり表現したりすることができるようにする。

そのために，学習の到達目標となるゴールを設定し，そのゴールに向かってどのような学習をしていくとよいのか，見通しをもたせる。ゴールは子どもの「知りたい」「伝えたい」という思いをもとに設定し，相手意識をもって自己表現できるものとする。単元のはじめにゴールに向かうための学習計画を教師と子どもが一緒に決めることで，子どもが一つ一つの学習に目的意識をもって取り組むことができるようにする。

英語は一つの単元が２～４時間と短いものが多く，全てについてゴールを設定することが困難な場合がある。そこで，一つの単元でゴールを設定するだけではなく，複数の単元にまたがった大きなゴールを設定することで，子どもが目的意識をもち続けて各単元の学習に取り組むことができるようにする。

(2)　相手意識をもって表現を選ばせる

コミュニケーションをとるときには，必ず相手が存在する。そして，伝えたいことが相手に伝わりやすいように話す必要がある。相手に理解してもらうためには，どのような言葉を用いるとよいのか，どのように表現するのかといった言葉や方略を工夫しなければならない。そのために，相手のことを考えて事前に内容や英語表現を検討する機会を設けることで，他者とかかわりながらよりよい表現を選ぶことができるようにする。さらに，相手とやりとりする活動を設定することで，その場で相手の様子や反応に応じて英語表現を選択することができるようにする。

英語は外国語の学習であることから，子どもの語彙には限りがある。子どもが適切な表現を選択・活用していくためには，多様な英語表現に触れていかなければならない。英語表現に触れさせるのは主に教師の役割であることから，英語では子どもと教師とのかかわりが非常に重要となる。教師同士のやりとりを子どもに見せることで，これまで子どもが気付かなかった内容に気付かせたり，子どもが表現を知りたいと感じたときに教師がモデルを示し，英語表現に触れさせたりする。また，毎時間の授業で Teacher talk を行い，単元で扱う英語表現に関連のある単語や文構造を示す。モジュール学習で既習表現の復習をしたり，メディアに取り上げられている時事を簡単な英語で聞かせたりするなど，単元のゴールには直結しないような表現であっても，意味のある文脈の中で触れることができるようにする。教師がたくさんの英語に触れさせていくことで，子どもは表現を理解し，自分が伝えたいと思う内容に適したものを決めることができる。

(3)　これまでの学びをふり返り 自己の変容に気付かせる

毎時間の授業で，自分の学びや他者からの学びをふり返り，ワークシートに記入する時間を設定する。ワークシートには，ねらいに達することができたかを自己評価する部分と，自由記述の部分を設ける。自己評価の部分は，主に英語表現について評価し，自由記述の部分では，気付いたことや考えたこと，感想などを書く。言いたかったことが伝えられたことや，伝えるために必要な表現を知ったこと，相手についてよりくわしく理解したことなどを自ら認識することで，子どもは自分の変容や成長を感じる。

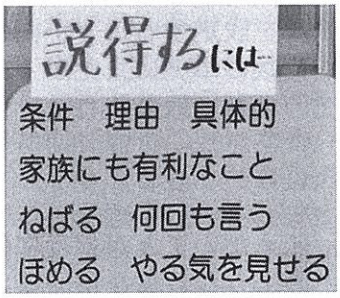
毎時間の授業に加えて，各単元や各学期での自分の学びをふり返る機会を設ける。単元や学期の終末に単元全体をふり返るワークシートを用意し，ゴールに到達することはできたか，見通しをもって学習することができたかを問う。また，単元でどのような力を身に付けたのかを問うことで，子どもは自分を客観的にとらえることができる。自分が決めた内容，言葉，方略はどうであったかをふり返ることで，自分にどのような力が身に付いたのかを認識することができる。そして，子どもは「単元や学期のはじめにはできなかったことができるようになっている」と実感し，自分の学びに満足感や達成感を味わうことができる。さらに，学期全体の学びについて感想を書くことで，これまでの学習から自分がどのようなことを決めてきたのかをふり返るとともに，次の学習への意欲を高めることができるようにする。

(1)　ゴールを見据えた学習計画

６年生「夏休み 何しよう？！説得大作戦」の実践から

本単元は，英語でのコミュニケーションを通して，自分の思いを伝え相手を説得する力を身に付けることをねらいとし，「夏休みにしたいことを伝えて家族を説得しよう」というゴールを設定した。小学校生活最後の夏休みを迎える子どもに，家族とコミュニケーションをとって一緒に過ごす時間を大切にしてほしいという教師の願いが単元設定の理由である。教師や友達とコミュニケーションをくり返すことで，伝えたい内容を整理したり適切な表現を選択したりできるようにした。

本単元の導入の１時間目に学習計画を立てる時間を設定した。ゴールを提示したあと，教師が「説得するためにはどうしたらよいか。」とたずねた。説得するとは具体的に何をすることなのかを考えることで，学習のイメージをもちやすくするためである。国語科で「説得する」という学習を経験していることや家族という相手を具体的に意識することで，子どもは説得に必要な事柄を考えることができた（資料１）。説得するために必要な事柄の中に理由があったことから，子どもはまず「やりたいこととその理由を考えて言えるようにする」という学習の第１段階を決めた。そして，「本当に説得できるかやってみる」「作戦を見直し，もう１回考える」「リハーサルをする」など，ゴールに到達するために必要なことを順序立てて決めることができた。ふりかえりで，A児は「夏休みにしたいことについて，家族を説得できそうですか」の問いに Yes と答え，「これからが楽しみになった。」と書いている。また，A児の日記には，「説得するために，私はお母さんにしかけようと思います。すごく楽しみです。」と書いている（資料２）。これらのことから，A児は「お母さんを説得する」という相手意識と目的意識をはっきりともっていることがわかる。夏休みにしたいことというトピックは子どもにとって身近であり，興味・関心がもてるものである。そこに「説得する」という目的を加えることにより，子どもにとって必要感のあるゴールとなったことがわかった。

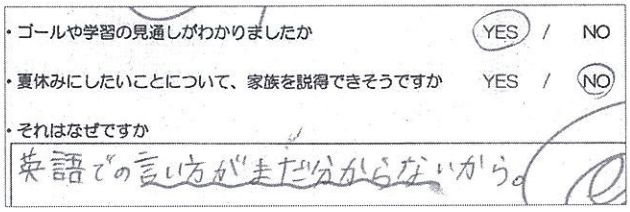


資料１　説得に必要な事柄

今日から英語の時間で家族に夏休みに行きたいところを伝え，連れて行ってもらう作戦を考え，やってみる！ということをやりました。
おもしろく説得させるために，おもしろいお母さんに私はしかけようと思います。すごく楽しみです。うまくいくといいな。

資料２　A児の日記

一方，B児は「家族を説得できそうですか」の問いに No と答え，その理由について「英語での言い方がまだ分からないから。」と書いていた（資料３）。B児は「シーカヤックに乗りたい」という思いがあり，それをどのように英語で表現できるのかがわからなかった。しかし，その日のB児の日記には，「私はやりたいことがとてもたくさんありました。それの中の一つでも説得してやる！と思いました。がんばります。」とあった。B児は，現段階ではまだわからないことがあると認識していたが，学習計画の中に「やりたいこととその理由を考えて言えるようにする」という授業が設定されていたことから，今後の学習を見通し，意欲をもって取り組もうとしていたと考えられる。学習計画を子どもと教師が一緒に決め，子どもが見通しをもつことで，「まだできない」と感じることでも「できるようになる」と子ども自身がよりよい自分の姿を思い描くことができる。ゴールを見据えた学習計画を立てることで，子どもは目的意識，相手意識をもつことができ，より意欲的に学びに向かうことができるようになるとわかった。


・ゴールや学習の見通しがわかりましたか　YES / NO
・夏休みにしたいことについて、家族を説得できそうですか　YES / NO
・それはなぜですか
英語での言い方がまだ分からないから。

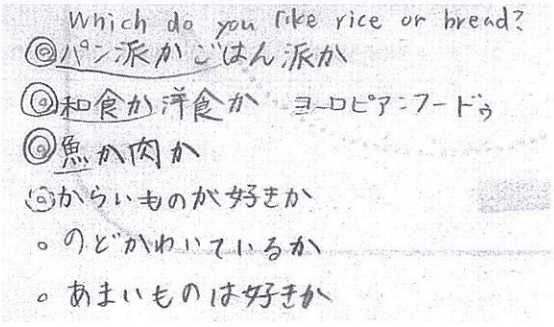
資料３　B児のふりかえり

⑵　相手意識をもって表現を選ばせる

６年生「好きな食べ物 おすすめのメニューは？」の実践から

本単元は，自分や相手のことについて，質問したり答えたりしながらやりとりをすることをねらいとし，お互いの好きな食べ物を伝え合う学習である。本実践では＜ジム先生（ALT）におすすめのメニューを提案しよう＞という課題を設定し，「ジム先生に」という相手意識をもてるようにした。子どもはALTの好きなものや今の体調，気分について質問し，その答えをもとにおすすめのメニューを考え，提案した。

課題を提示したあと，授業の導入で Teacher talk を行い，レストランのメニューを見せながら Which do you like ~? という文をくり返し聞かせた。この文は，後のアクティビティでALTに質問するときに使ってほしい文構造である。ALTに質問する前に，グループごとに質問する内容を考える時間を設定した。D児のワークシートには「パン派かごはん派か」という内容の上に Which do you like rice or bread? と書き記されていることから，Teacher talk でくり返し聞いた表現が身に付いていることがわかる（資料４）。また，「からいものが好きか」「のどがかわいているか」など，これまで学習した表現の中から適切なものを選択し，質問しようと考えていた。これらの表現は，ALTとのあいさつや，Teacher talk でのインタラクションでよく使われる表現である。既習表現をくり返し聞くことで，子どもは必要に応じて適切に表現を選択することができるようになったと考えられる。



資料４　D児の決めた質問

E班の子どもはメニューに刺身を入れようと考えた。そこで，ALTとのやりとりの場面で「わさびは食べられるのか」という疑問をもちALTに Can you eat Wasabi? と質問することを決めた（資料５）。その後に質問している Do you like Japanese food? は，E班の子どもが事前に決めておいた質問ではなかったが，「わさびが好き」という ALT の返答を聞き，その場でE班の子どもが質問しようと決めたことである。質問をしながら，F児はALTの答えの中に，like と love があることに気付いた。F児は like と love をしっかりと聞き分け，その意味も理解した上でメニューを天ぷらにした。「ALTは天ぷらが大好きである」ということは，事前に考えていた Can you eat Wasabi? だけでは知りえない情報であり，ALTとかかわり，やりとりすることで知ることができた情報である。事前に考えた質問だけではなく，その場でALTが話した英語を聞くことによって，E班の子どもは「わさびが食べられる」という情報と，「和食が好きで納豆が好き，天ぷらが大好き」という情報を結び付け，自分たちの考えを整理しながら提案するメニューを決めることができた。

S1 : Can you eat Wasabi?
Jim: Yes. I like Wasabi.
S2 : Do you like Japanese food?
Jim: Yes. I like natto and I love tempura.

資料５　E班の質問の様子

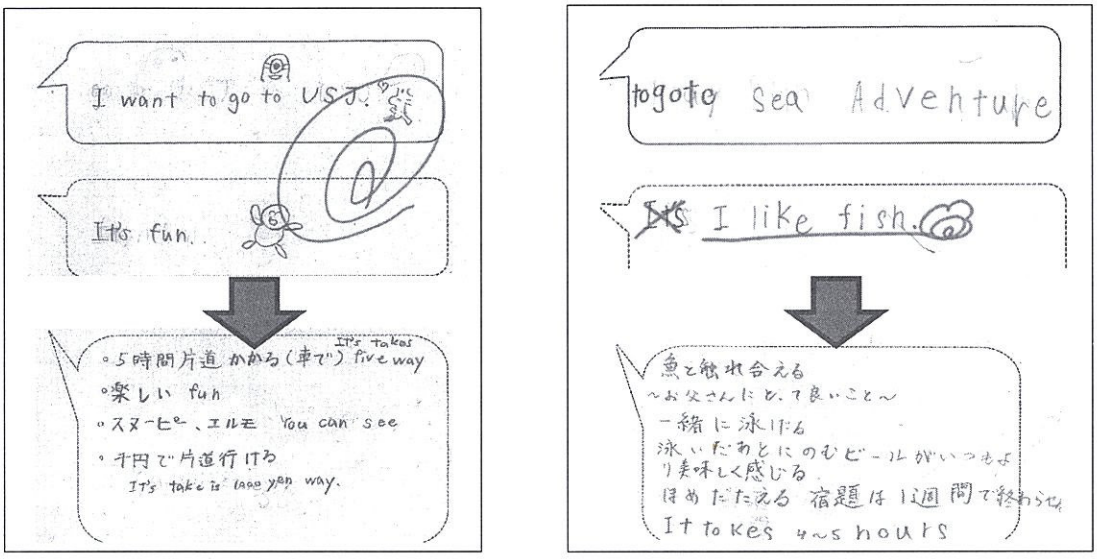
６年生「夏休み何しよう？！説得大作戦」の実践から

前時までの学習で，子どもはやりたいこととその理由を考えていた。例えば I want to go to Tokyo. It's fun. などである。前時の段階では，ほとんどの子どもが「家族を説得できる」と考えていた。「家族を説得できそう」と答えた理由として，「理由がしっかり言えたから」「くわしく言う言い方がわかったから」「覚えて言えるようになったから」などを挙げていた。自分がわかった，自分が言えた，という自分の立場から「家族を説得できる」と考えていることがわかる。しかし，本当に家族を説得するには自分が英語で言えるようになったというだけでは不十分である。説得する相手（家族）の立場に立って，説得する理由を考えなければならない。理由を見直す視点を与える手だてとして，本時では，ALTとHRTのやりとりをモデルとして子どもに提示した（資料６）。ALTはお父さん役，HRTは子ども役である。モデルで話されている内容に目を向けさせるために，子どもに「何を言っているか」を聞くように指示した。

HRT: I want to go to Tokyo. It's fun.
ALT: Uh….
HRT: あれ，納得しないよ。どうしようかな・・・。
ALT: What do you want to do in Tokyo?
HRT: I want to go to Tokyo Sky Tree. It's nice. Nice view.
ALT: Oh, nice view. Ok, next. How long does it take to Tokyo?
HRT: It takes two and half hours by shinkansen.
ALT: Oh, shinkansen. I see…. What is the good point for me?
HRT: For you?! Uh…. You can see sumo matches. You like sumo, right?

資料６　ALT と HRT のやりとり

モデルを聞いたあと，子どもは「何をしたいか具体的に言う」「どれくらい時間がかかるかを言う」「お父さん（相手）にとっての利点を言う」など，聞き取った内容をもとに，どのような理由を言えば説得できるのかを考えていた。ALT と HRT のやりとりを聞くことで，一度決めた理由を見直したのである。このやりとりにより，子どもの理由は次のように変化した(資料７)。



資料７　Ｇ児（左）Ｈ児（右）の理由の変化

Ｇ児のワークシートからは，前時は It's fun. だった理由が，「車で片道５時間かかる」「スヌーピーやエルモに会える」「片道千円で行ける」に変化していることがわかる。Ｈ児のワークシートも，前時の理由が I like fish. となっていたのに対し，本時では「お父さんにとってよいこと 一緒に泳げる」「泳いだ後のビールがいつもより美味しく感じる」と変化していた。Ｇ児のふりかえりには，「前は楽しいとかおもしろいとかしか考えられなかったけど，具体的な理由を考えられたのがよかった。」とある。この実践から，子どもが教師のモデルを聞いて理解したことを通して，理由を考え直し，自分の立場から考えた理由が相手の立場を考えた理由へと深まっていたことがわかる。子どもが教師とかかわることで，一度自分が決めた内容を見直し相手意識のある内容を決めることができた。

一方で，Ｇ児のワークシートには内容に応じた英語表現が書かれているのに対し，Ｈ児のワークシートは日本語での表記のみで，自分の決めた内容を英語で表現することができていない。やりとりのあと，子どもが決めた内容を英語で表現できるようにするために，教師は You can see ~. や I will finish my homework in July. などのモデルを示した。Ｈ児は自分が決めた内容に合う表現がモデルに含まれていなかったことから，適切な表現を選択することができなかったと考えられる。本実践では，子どもが伝えたいと思っている内容があまりにも多岐に渡りすぎており，教師がモデルを提示するだけでは十分に子どものニーズに対応することができなかった。モデルに使用する表現がより子どものニーズに即したものとなるよう，表現を十分に検討したり，子どもと教師がやりとりをする中で表現を聞かせたりする

などの工夫が必要である。

(3) これまでの学びをふり返り 自己の変容に気付かせる
６年生「夏休み何しよう？！説得大作戦」の実践から

本単元では，１時間ごとの授業のふりかえりと単元・１学期全体のふりかえりをした。１時間ごとのふりかえりでは，それぞれの授業での子どもの変容を見取るために毎時間「家族を説得できそうですか」「それはなぜですか」とたずねた。「家族を説得できそうですか」の問いに対し，学習計画を立てた１時間目に No と答えていたＢ児は，２時間目に英語表現がわかったことから Yes と答えていた。しかし３時間目には再び No となり，その理由として「もう少し説得力のある理由を考えたいから」と答えていた。これらのふりかえりから，学習を進める中で，Ｂ児は英語の言い方がわかったことに満足はしたものの，さらに説得力のある理由にしたいと考えていたことがわかる。説得力のある理由にするために，Ｂ児は「宿題は７月中に終わらせる」「車で２時間で行ける」など，相手意識のある理由を考えていた。単元全体のふりかえりで，Ｂ児は，「伝えたいことを英語で伝えることができそうですか」の問いに Yes と答え，「説得力のある理由を考えることができましたか」の問いにも Yes と答えている。Ｂ児は，単元のはじめにはわからなかった英語の言い方がわかるようになり，相手意識をもった説得力のある理由を考えられたことで「家族を説得できそうだ」と感じていることがわかる。

Ｉ児は当初「夏休みにやりたいことなんてない。」と言い，学習計画を立てたときのふりかえりには「今まで（家族を）説得できたことがない。」と書いていた。しかし，２時間目には I want to play soccer. It's fun. と考えることができ，「夏休みにしたいことと理由を英語で言えましたか」の問いに Yes と答えていた。さらに，３時間目で「勉強は早めに終わらせる」「一緒にサッカーができる」など相手を意識した理由を考えられたことで，「説得できそう」とふり返っていた。単元全体のふりかえりでは，「この単元で身につけた力は何ですか」の問いに，Ｉ児は「ぼくは説得力があがった。」と答えた（資料８）。「全く思いつかずにいた」自分が，「ちょっと説得できそう」な自分に変化していることを感じ取っている。Ｉ児が単元全体の自分の学びをふり返り，客観的に自分をとらえていることがわかる。このように，１時間ごとのふりかえりに加え，単元全体をふり返ることで子どもは自己の変容や成長を感じることができるのだとわかった。さらに，Ｉ児は１学期をふり返って「１学期で習った英語をこれからも使っていきたいと思った。この英語の授業はいろんな人たちを説得する説得力も上がったのですごくいい１学期になった。」と書いている。できなかったことができるようになった，とＩ児自身が感じ取ることで，次の学習への意欲が高まり，自分の学びに満足感を味わうことができることがわかった。

> ぼくはサッカーをしたいという説得をしようと思ってやっていたけど，全く思いつかずにいた。でもどんどんちょっとずつわかってきて，今までは全然説得できなかったけど，今はちょっと説得できそうなので，ぼくは説得力があがった。

資料８　Ｉ児のふりかえり

成果と課題

決める授業の手だてにより，子どもはゴールを見据え目的意識，相手意識をもって意欲的に学習に取り組むことができた。また，子どもが教師とかかわりたくさんの英語表現に触れることで，自分の知りたいこと，伝えたいことについて深く考え，表出することができるようになった。ふりかえりからは，子どもが自分の成長を認識していることを見取ることができた。

本校の英語では，特定の英語表現のみをくり返し扱うだけではなく，子どもが本当に「知りたい」「伝えたい」と思っていることを理解し，伝えられるような授業をめざしている。本実践により，コミュニケーションの内容には深まりが見られた一方で，英語表現の選択・活用については課題が残った。教師が子どもにモデルを一方的に示すだけでは子どものニーズに十分に応えることはできず，子どもが本当に伝えたいと思ったことは伝えられない。今後，子どもに適切な英語表現を選択・活用させるために，教師がどのように子どもにかかわっていくのかを考えていかなければならない。